

# 心に残った南部戦跡

## 退職者旅行に参加して

岡浦益実

青い海に包まれた海洋博記念公園や、東南植物園の亜熱帯植物も素晴らしい。世界一美しい鐘乳洞といわれる玉泉洞、そして途方もなく高層な珊瑚がズラリ陳列されているサンゴ博物館など、目をみはるものも少なくないが、私たちが戦中旅行で、最も強く心にのこったのは、何となくも南部戦跡めぐりだ。

「この心なびた静かな景色を眺めますよ。」と『鉄の暴風』といわれたあんな激しい戦いがあったのかと思わずに思われることではないでしょう。流れゆく歳月は痛ましい戦争の爪跡をひとつひとつ消し去ってはいきませんが、未来永劫消えることのない尊い犠牲者の魂が、世界の平和を見守っているのではないかと。

三日間、ガイドを受け持ってもらった沖繩観光バスの、知念いすみ嬢の説明が私達の胸をうつ。軍民一体となった激戦が、この島尻の南端で八十余日にわたって行なわれ、敵味方とも大変な犠牲者を出したという。ひめゆり部隊や鉄血勤皇隊として動員され、砲煙弾雨の中で、短く一生を盡して散らした少女や健



守礼の門

那覇市街を見おろす首里の丘にそびえるこの門は、尚清王代の大永年(1521→1527)に創建されたもので、首里城に入る第一の門であった。現在の門は1958年に復元されたもので、沖繩のシンボルとなっている。



ひめゆりの塔

「ひめゆりの塔」は、太平洋戦争で軍人と共に若き命を散らした沖繩女子学生と職員158名がたえな

青い海が美しかった。万座毛の近くカメとワニに似た島が浮かぶ。



この空前絶後ともいえる惨憺な戦い、身をもって体験した沖繩民は、恒久的な平和を求めて闘いつづけているが、果たして日本国のお偉方は、この尊い犠牲を平和の礎として認めているのだろうか。嘉手納飛行場をはじめとする巨大な軍事基地。自衛隊移駐などの実態をみると、沖繩に平和が蘇ったとは考えられない。

また、「反戦・平和は国民の心」とのスローガンを掲げて十一月に再選されたばかりの西銘沖繩県知事は、十二月十六日の県議会で、「沖繩地上戦で県民が旧日本軍に殺害されたという高校日本史の記載は好ましくない」という趣旨の発言をした。

十二月十二日からの三泊四日の楽しい旅に、別れを惜む最期の夜は、さすがに「三池」を思わせる素敵な晩餐会になった。泡盛の水割りや陽気になり、次つぎに披露される歌や珍芸に興じた後、奥さんたち(十三人)の「三池の主婦の子守唄」の合唱に心をゆきながら、やがて三十七人退職されました。

有意義に過ごした退職記念旅行は、各人にとって生涯の懐かしい思い出のひと時となり、そしてそれは、大きなウェイトを占めることであろう。岡浦益実さんは元五分会所属でしたが、昨年六月十七日付で定年退職されました。

五月になると水温も上がり、ぼつぼつハクラ、スズキなどの大物の時期となる。この地方では、当歳魚をセゴと呼び、四年物になるとハクラと呼ぶ。私達の仲間では七百匁以上をスズキと言っている。大きいものは四キログラムを超え、いわゆる出世魚である。今では何を釣るにしても夜は電気ウキを使うが、昔は釣師の面目はシヤク釣りにおおとどいていた。

## 囚人労働遺跡を訪ねる

### 俱会一処

小崎文人

すでに福寿院については述べましたが、その福寿院の建つ権現山の北側の中腹に、俱会一処の文字を刻んだ石の墓標が西方を向いて立っています。囚人墓といわれるもの。

「この文字が描かれた、例の三井のマークとともに、三井鉱山が大正十年に建てたという文字も刻まれています。それだけで、今となつては、これが囚人墓か、それとも否かは判然しません。

でも、かつては付近に住んでいた古来の一人から「おちちちちち」に散らばっていた囚徒たちの骨を、この墓標には、井形のなかに三

「死亡者又は刑死者アルトキハ其年月日ヲ記シ典獄ヨリ親族ニ通知スベシ」(第七三條)。「死者ノ親族若クハ故旧ニ其遺骸ノ下付ヲ許シタルトキハ其者ヲシテ死亡ニ証明セシムベシ。監督ニ於テ遺骸ヲ埋葬シタルトキハ棺ニ入レテ之ヲ埋メ其上ニ三寸長サ三寸五寸過サル尺名標ヲ建ツベシ」(第七五條)。「仮葬シタル死亡

者刑死者ノ遺骸ニシテ滿三箇年ニ至ルモ引取人ナキトキハ更ニ合葬スルコトヲ得。但合葬シタルトキハ其墓標ニ石ヲ用ユベシ」(第五

八條)。「死亡者又は刑死者アルトキハ其年月日ヲ記シ典獄ヨリ親族ニ通知スベシ」(第七三條)。「死者ノ親族若クハ故旧ニ其遺骸ノ下付ヲ許シタルトキハ其者ヲシテ死亡ニ証明セシムベシ。監督ニ於テ遺骸ヲ埋葬シタルトキハ棺ニ入レテ之ヲ埋メ其上ニ三寸長サ三寸五寸過サル尺名標ヲ建ツベシ」(第七五條)。「仮葬シタル死亡

の空欄が使われたと聞いては、非情というほかありません。昭和三十八年六月、「おーい居るか……」弟の声である。「早よう用意せん、中島でハクラの釣れよげなばん。餌も買った、場所も聞いて来たけんまかせん……」

「一番方の土曜日で、帰ったばかりの俺は、弟が言い終らぬうちに竿を手にしていた。『よし乗れ』」

その夜の釣りは三千円が頭から離れず、さんさんであった。



囚人墓といわれ、いやそうでなくて無縁仏を合葬した墓だといわれるなど、この頃ゆらぎ始めていますが、果たして地下に眠る故人たちは何を語りたでしょう。

「前のバイクは心配せんでよか、ちゃんと先で捕まってる。他人の心配は後でせん、あんたは七十五キロ出したらいい。何か文句あるな」



釣りの手帳余談  
連載第十八回  
取られの巻 (二)  
石田 鈍 竿